

「震災から見ええたアジアとのつながり」

桐蔭横浜大学教授 ペマ・ギャルポ氏

オイスカとの出会い

私は、1967年、皆さんより少し若い時にオイスカと出会いました。来日2年目で中学3年生でした。ダライ・ラマ法王の埼玉ご訪問の折、中野良子総裁と先代の総裁と一緒に来られた時です。私の記憶ではその年にオイスカは初めてインドに技術員を派遣しています。インドはその頃、あまり雨が降らず、食糧の危機で、オイスカは緑の革命の手助けをしました。同様に難民だったチベットの人たちを大勢日本に呼んで農業、車の修理、看護婦など役に立つ人たちを育ててくれました。以来、私は45年間オイスカと関わってきました。ですから、私がオイスカの皆さんに話をする時、客観的になれず感情が入ります。私のオイスカに対する期待、感謝の気持ちが入ってしまうことをご理解ください。

関心を持って掘り下げる

私は来年60歳を迎えますが、ちょうど今年60冊目の本を出しました。

チベットに生まれ、インドに亡命後、日本で学んだペマ・ギャルポ氏は、2005年に日本に帰化している。世界を知り、日本の強みも弱みも知るペマ氏が語るアジアの中のリーダーたるべき日本の姿とは。9月29日に開催された静岡県浜松市のオイスカ高校での講演を収録。



この60冊に関して一貫しているのは、自分なりに真実を語るといふことです。それは本人の前でいえないことはいわない、そして裏付けを取ることです。ここに今日の新聞を持ってきました。最近みんなが関心を持っている日中問題、竹島あるいは尖閣諸島の問題についての記事がたくさんあります。一つ例を挙げると、中国の外務大臣が外交官としてはあまり品のよくない「泥棒」という言葉を日本に対して使っています。新聞には「島々（尖閣諸島）は盗まれた」と中国が国連で語った」と書いてあります。私は「盗まれたとはどういうことか、何を根拠にそういうのか」といいたくなるんです。私は何か書いたりする時は、少なくとも後で相手に提供できる証拠を持つようになっています。それが大切なことです。それから、たくさん本を書くために新聞を丁寧に読んでいます。皆さんも、関心のあることなど自分でテーマを決めてスクラップブックをつくってみてください。最近、日本のサブカルチャーとしてのマンガは世

界中に広がっていますね。マンガは一コマずつ違う絵を描いていますが、通して見ることで動きが出てきます。映画も一コマずつ撮っているけど流すと動いて見える。それと同じように皆さんもスクラップブックをつくと、やがてそれが動き出すんです。高校生の皆さんにも何かに関心を持ってもらいたいと思います。

模範国家だった日本

大学の教員をしていて悲しく感じていることは、今の若い人には夢や目標がないということです。卒業する間際になっても自分が何をするか決めていない人がたくさんいます。それはあまり物事に関心を持たずになんとなく一日を過ごしているからだと思います。私が日本に来た46年



ダライ・ラマ法王とオイスカの創立者・中野與之助
(写真は1967年にインドで撮影されたもの)

ペマ・ギャルポ
チベット出身の国際政治学者。1965年に来日。チベット文化研究会所長・国家基本問題研究所の客員研究員などの要職に就き、公益財団法人オイスカの評議員も務める。著書は『おかげさまで生きる』（近代文芸社）『目録めよ、麗しの国、立上りなれ日本！』（雷韻出版）『日本人が知らなかったチベットの真実』（海電社）など多数。